



## 愛の牧歌劇オペラ「アマールと夜の訪問者」

星のきれいな夜のこと。

足の悪い少年アマールとその母親が暮らす貧しいあばら家に、宿を求めて立ち寄った人びとがいました。それはイエス・キリストの誕生を祝うために東方からはるばる旅をしてきた3人の王（博士、賢人とも呼ばれる）たちの一行でした。

集まった羊飼いたちが、歌と踊りで客人たちをもてなします。が、人々が寝静まった後、貧しい母親は、王たちが幼子への贈物とするために携えていた豪華な宝物に心を乱され、つい道をあやまった行動に――。しかしアマールは母親をかばい、代わりにこれをその幼子への贈物にと、自分の杖を差し出します。その時奇蹟が起こり、彼の足は治ってしまいました……。

この心あたたまる物語を愉しい音楽で描いた室内オペラ「アマールと夜の訪問者」は、内容からして、クリスマスのシーズンによく上演される作品です。今回は牧村邦彦の指揮、岩田達宗の演出、松生紘子の装置、増田恵美の衣装などにより上演されますが、牧歌劇調の舞台に繰り広げられる羊飼いたちの素朴な歌とダンス、3人の王たちの厳めしくもコミカルな演技も面白く、新型コロナ禍に落ち着かない日々を送る私たちの心を慰めてくれることでしょう。

作曲者ジャン・カルロ・メノッティは、イタリア系アメリカ人です。このオペラは1951年（40歳）に作曲され、同年暮のクリスマス・イヴにテレビ放送で初演されました。彼はこの他にも、インチキ占い師の破滅を描いた「霊媒」、亡命手続きの悲劇を描いた「領事」、恋人たちのコミュニケーション手段を皮肉った「電話」、中年女性たちのコミカルな騒動を描いた「泥棒とオールドミス」など、暗いものから陽気なものまで、リアリスティックなストーリーのオペラを書いています。それらに比べるとこの「アマールと夜の訪問者」は、ややおとぎ話的な内容で、音楽も田園的な美しさに溢れていますので、ほのぼのとした気持になれるでしょう。

クリスマスの日を、クリスマスのオペラでお楽しみ下さい。

（東条碩夫 音楽評論）

